（別紙様式）　　（Ａ３判横）

令 和 6 年 度　学 校 自 己 評 価 シ ス テ ム シ ー ト　国際学院中学校高等学校（高等部）

目指す学校像	建学の精神「誠実・研鑽・慈愛・信頼・和睦」を身に付けた人材の育成

重　点　目　標	1　教育力の向上 2　グローバルネットワーク活動の推進 3　広報募集活動の強化

達成度		
	A	ほぼ達成（８割以上）
	B	概ね達成（６割以上）
	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

※学校評価実施日とは、学校評価委員会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

学校評価委員　　５名 事務局(教職員)　８名

※　重点目標は３つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目（年度達成目標を意味する。）は複数設定可。
※　番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学　校　自　己　評　価								学　校　評　価
年　度　目　標					年 度 評 価（ １ 月３１日 現在 ）			実施日　令和７年２月１０日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	評価委員からの意見・要望・評価等
1	①学年行事において、生徒主体が主体的に運営できるようになっている。しかし、一部の生徒に負担が生じているところがあり、多くの生徒が関わることができるようにしていくことが課題である。保護者や地域の連携を活用していく工夫が必要である。 ②今年度DXハイスクール認定校として採択された。ICTを活用した環境の整備をさらに推し進めて引く必要がある。また、すべての生徒が安心して、前向きに学校生活に取り組むことができる環境を全教職員が一致して取り組む必要がある。 ③年内入試などの受験環境に対応し、進路実績向上を推進する取組が必要である。	①主体性の醸成 ②教育環境の整備 ③進路実績の向上	①学校行事終了後、教職員と代表生徒で振り返りを行い、できたこと、課題とその改善策について発表し次年度につなげる。 ①選択制による土曜講座を実施する。 ①②アンケートを活用し全校生徒の学校行事や授業改善への参画を推進する。 ②DXについて、教員研修を実施する。 ③最新の入試情報を収集するとともに、個々の生徒にニーズに応じた進路指導を考え、実践していく。 ③進路別のガイダンスを教員、生徒保護者向けに実施する。	①学校運営、行事に生徒が主体的に関わることができたか。 ②アンケートの結果を活用し、気改善につなげることができたか。 ②DXハイスクールとしての取組を実施することができたか。 ③進路実績目標を達成することができたか。	①体育祭では例年以上に生徒がそれぞれの役割をこなしスムーズに運営することできた。また、海外研修、国内研修などの宿泊行事では生徒主体の組織で運営することができた。 ②授業アンケートの結果をもとに授業改善につなげられた部分があるが、さらに推進していく必要がある。 ②教職員向けに対面での研修、e-lerningの研修を実施することができた。生徒については、五峯祭でその成果の一部を来場者に披露することができた。 ③今年度大学進学率が初めて70％を超えることができ、立教大学・中央大学・法政大学・日大獣医学科に合格している。(3月26日現在)	B	生徒は学校行事において、実施と振り返りについてはより主体性を発揮できるようになっている。今後はさらに計画の部分から参画させるようにしていく。 授業アンケートや研究授業を通して、授業が改善されている部分がある。しかし、十分に機能しているとはいえない。さらなる工夫した取組が必要である。また、DXハイスクールの取組についても、学校全体の方向性を示し、全教職員が取り組んでいくことが必要である。 進路実現に向けて、適切な数値目標を検討し、全教職員に落とし込んでいくようにする。	・土曜講座について、生徒が自分の興味に合わせて選択できるということは評価できる。今後に期待したい。 ・高等部について、自己評価システムシートについて、教師が生徒とどう関わってきたか、どのような支援を行ったのか示すことが大切である。今後は、教師中心から生徒中心に動いていくことが大切であると感じるので、推進していくことを期待したい。 ・本校については、課題に正対しながら工夫と挑戦をしている点について、高い信頼がある。今後も期待をしたい。
2	①ESDやSDGsの教育は定着してきた。アンケートを活用し、継続的にブラッシュアップを図っていくことが大切である。 ②海外研修、国内研修やオンラインでの交流などさまざまな形で国際交流を図っている。地域など学校外との連携をさらに深めていくことが課題である。	①ESD、SDGs達成に向けた教育活動の推進 ②地域との連携や海外交流などの推進	①日頃の教育活動や学校行事の中でSDGsを意識した取り組みを実践する。 ①企業との連携活動を積極的に活用する。 ①SDGsの目標達成のため本校の教育活動の成果を図るアンケート調査を実施する。 ②地域の開放講座に積極的に参加し、交流を図る。 ②ESDやSDGsの教育を意識した海外研修を実施する。	①企業との連携をすることができたか。 ②地域の活動に積極的にかかわることができたか。 ①②オンライン交流や海外研修を通じた国際交流の中でESDやSDGsの取組を推進することができたか。	①SDGs、ESD教育について、継続的に取り組むことができている。例年の取組に加え、今年は外務省高校講座を実施した。 ②海外研修（マレーシア、オーストラリア）の実施、オンライン交流（マレーシア、台湾）、中国の学校との対面での交流、学校開放講座、五峯祭で地域との連携を実施をすることができた。	B	ESDやSDGｓについて、SDGｓに関する理解を深めることができた生徒の割合は95.9%から90.9% に、SDGｓ17目標達成のために行動できた生徒の割合は69.6%から63.6%にやや減少した。これは 小、中学校段階からこれらの取組が浸透してきたことによるものと思われる。ともに改善が必要である。 ESD活動の発信拠点として、普段の教育活動に、地域の企業や大学との連携について検討していく。	・SDGsや理性教育の推進、海外研修、国際交流で多くの経験を培ってもらいたい。 ・SDGsについて、本校の学びの中で何が深まったか目標設定をしていくべきである。 ・海外研修について、国内と海外で選択制となると積極的に海外に行くという選択をとる生徒は少ないのではないか。
3	①本校の認知度や教育の成果について広める取り組みを増やし、さらに本校のブランド力を上げていく取り組みが必要である。 ②受験生やその保護者に向けた情報発信としては、ウェブサイト、パンフレット、学校説明会などの多様な機会を設けている。ここ数年、界隈ではSNSの活用、とくにSNSと既存メディアとを組み合わせる手法が盛んになっているが、その時流に遅れないようにしたい。	①教育活動を発信することによる生徒の自己効力感の醸成 ②本校の教育方針に共感する受験生の確保	①生徒の教育活動の成果を多様な媒体で発信する。 ①②パブリシティ（メディア活用した広報活動）に注力する。 ②SNSでの情報発信についてはトラブルの懸念もあることから入念なチェックを行い、同時に積極的に活用する。	①②SNSとウェブサイトについて魅力的なコンテンツを発信できたか。 ①②リーチ・インプレッションあるいはフォロワー数といった数値目標が達成できたか。 ①②パブリシティについてはメディア露出の回数・時間といった量的な目標と内容面での質的な目標を達成できたか。 ②受験者数、入学者数ともに昨年度を上回ることができたか。	①②ウェブサイトや各種SNS（特にFacebook, YouTube, Instagram）を活用し、本校の教育の取組とその成果についての情報発信ができている。ところが、広がりとしては、フォロワー数等の指標をみるに他校に比べて伸びていない。一方、パブリシティとしては校則改正のような本校を主軸にした露出が減ったものの、本校を舞台としたドラマや映画の撮影、テレビ企画への参加などを通じ、生徒の自己効力感の醸成とともに本校の魅力を広く伝えることができている。 ②LINEを活用した募集活動を今年度から行い、現時点では、受験者数と単願者数で昨年度を上回っており、入学者数の増加が見込まれている。	A	広報募集活動を組織的に運用できる体制を整える。 保護者会と連携し、学校の取り組みの改善を図っていく。 近隣の公立高校の倍率などの状況を踏まえた柔軟な広報募集活動が必要である。 本校のブランド力を上げていく取組とその発信を続けていく。	・ブランド化について、少子高齢化によって伊奈町が変わっていく中で、民間の力が大切である。地域に根差した町づくりとして、伊奈町は小中高大と充実しており地理的な条件が整っている。そのため、地域クラブのようなものを立ち上げることはできないか。部活動の地域移行が進んでいるが、伊奈町は停滞している。地元企業も巻き込みながら子供たちが参画できるような地域クラブを期待したい。 ・伊奈町開放講座はとても素晴らしい取り組みだと感じる。このような取り組みによって、伊奈町の人々に国際学院を知ってもらうきっかけになるのではないか。 ・SNS関係について、学校のオフィシャルでの活動をしていることを多くの人に知ってもらうために、BLENDを活用し、保護者に知ってもらうような努力をしてみたらどうか。